

# 私たちの広場

【特集】平成18年度明るい選挙推進優良活動表彰

【連載】ドイツの政治教育〈最終回〉

【連載】絵本 英国・選挙腐敗防止の軌跡〈最終回〉



No.293

2007年3月30日

財団法人 明るい選挙推進協会

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| <b>「会長就任にあたって」</b> .....             | 3  |
| 明るい選挙推進協会会長 佐々木 毅                    |    |
| <b>特集 平成18年度明るい選挙推進優良活動表彰</b> .....  | 4  |
| ・ 仙台選挙サポーターの会.....                   | 4  |
| ・ 品川区明るい選挙推進協議会.....                 | 6  |
| ・ 横浜市青葉区明るい選挙推進協議会.....              | 8  |
| ・ 明るい選挙推進サポーター.....                  | 9  |
| ・ 名古屋市青年選挙ボランティア.....                | 11 |
| ・ たつの夢くらぶ.....                       | 13 |
| ・ 青年法政大学周南会場運営委員会.....               | 14 |
| ・ ミニ選挙管理委員会2001 (in延岡).....          | 16 |
| <b>ドイツの政治教育〈最終回〉</b> .....           | 18 |
| 名古屋大学助教授 近藤 孝弘                       |    |
| <b>人をその気にさせるコミュニケーション〈最終回〉</b> ..... | 20 |
| <b>絵本 英国・選挙腐敗防止の軌跡〈最終回〉</b> .....    | 24 |
| <b>中央研修会報告</b> .....                 | 25 |
| <b>事業紹介 ケイタイ・ジャーナリスト・コンテスト</b> ..... | 26 |
| <b>メイスイNET</b> .....                 | 27 |
| <b>協会からのお知らせ</b> .....               | 27 |

平成18年度  
明るい選挙啓発ポスター

文部科学大臣・総務大臣賞作品



横尾 紗也加さん

宮崎県立高鍋高等学校1年 (受賞当時)

### 〈表紙の紹介〉

村上 尚徳

(文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)

投票によって社会がつけられていることを象徴的に表すために、空に投票箱の入り口をかき、その世界自体を絵のよう表現し、外から人がのぞき込むという独創的でユニークな構図で描かれたポスターです。ここでは、文字を控えめに入れることにより、標語の意味が説得力のあるものとして聞こえてきます。

(雑誌「選挙」平成18年12月号から転載)

# 会長就任にあたって

明るい選挙推進協会会長 佐々木 毅



プロフィール  
昭和17年、秋田県生まれ。  
東京大学法学部長、総長を経て、現在、21世紀臨調共同代表、学習院大学法学部政治学  
科教授。  
第8次選挙制度審議会などの  
委員を歴任。

この度、内田満前会長の急逝の後をうけて会長に就任することになりました。何分にも突然のことであり、万事不案内でございませうが、皆様方のご協力を得て、できるだけ早く職務にキャッチアップするようにしたいと存じます。

内田先生とは三〇年にわたって個人的に親しくお付き合いしてまいりました。今回の就任要請も先生の御遺志の現れと考え、お引き受けしました。改めて先生の本協会に対するご尽力に感謝申し上げますと共に、皆様と共にご冥福をお祈りしたいと思います。

私自身も政治学者であり、本協会の活動に對してはかねてから関心をもつて来ました。私はかつて第八次選挙制度審議会の最年少メンバーでした。当時は金権政治批判が厳しく、政治改革が国政最大のテーマの一つでした。この審議会の答申もあって後に大きな改革が次々に行われましたが、私はその後も民間政治臨調や現在の21世紀臨調の活動を通して選挙のあり方から日本の政治を考えるとという活

動を続けてきました。

昭和二七年の公明選挙連盟設立から五五年、昭和五一年の当協会発足から数えて三一年、この長きにわたり、多くの方々の弛まぬ努力と熱意により、この運動が脈々と受け継がれてきたことは実に素晴らしいことです。この間蓄えられた経験と知識を基盤として、今後も着実な歩みを続けて行きたいと思います。

言うまでもなく、選挙をめぐる情勢は時代と共に変化し、われわれが直面しなければならぬ新しい課題も姿を現し始めております。早速、今度の首長選挙からマニフェストの配布ができるようになりました。これは今年だけでなく、今後の地方選挙のあり方にとって重大な試金石になります。また、周知のように選挙におけるインターネットの扱いも目前の課題です。選挙運動もまた一つの変化の時を迎えているように見受けられます。

同時に、投票率低下の問題は依然として大問題です。特に、今年は亥年であり、十二年

に一度統一地方選挙と参議院選挙が相次いで行われる年に当たるわけで、それは深刻な問題になる可能性があります。前回の亥年選挙の際の参議院の投票率は遂に五〇パーセント割れを起したことを忘れることができません。また、大規模な市町村合併に伴いまして本協会の草の根部分の再編が避けられなくなっておりますが、これについては皆様と共に継続的な努力をしていく必要があります。これは本協会の足腰をもう一度強化し、国民を巻き込んだ運動を展開するためには是非とも取り組まなければならない課題です。

これから夏にかけて皆様には一層のご尽力とご活躍をいただかなければなりません。これまでのご経験を生かしつつ、新たな挑戦に向けて若い世代を巻き込みながら奮闘されることを切望しております。

私自身も皆様と一緒にこれからの課題に取り組んでいくつもりです。「明るい選挙」からさらに「よい選挙」の実現に向けて、継続的な努力を続けてまいります。



平成18年度

# 明るい選挙推進 優良活動表彰

特集

(財) 明るい選挙推進協会は、昭和55年度から昨年度まで「明るい選挙推進運動優良団体表彰」を行ってききましたが、本年度からこれを「明るい選挙推進優良活動表彰」に改めました。被表彰団体には明るい選挙推進協議会だけでなく、その内部組織や関連団体、さらには自治会、婦人会、NPO等も含むこととし、当該団体の全体像ではなく、その活動（特定の事業又は団体としての全体の活動）に着目して、受賞を希望する団体からの応募方式により行うこととしました。

その結果、本年度は18団体から応募をいただきました。いずれも他の範となる立派な活動を行っている団体ばかりでありましたが、協会内に設けた選考委員会（学識経験者9名で構成）における厳選の結果、8つの団体が選ばれ、理事会において最終決定されました。

以下、受賞団体の活動の概要をご紹介します。

## 仙台選挙サポーターの会（宮城県仙台市）

― マスコットキャラクターの活用を中心に幅広い活動 ―

### チーム制で活動

仙台選挙サポーターの会は、若年層の選挙離れ対策を考え、行政と一緒に活動してもらうために、平成一六年三月に仙台市選

挙管理委員会が公募した選挙サポーターによって構成される選挙啓発団体である。会員は、一八歳以上の市内在住者および市内への通勤・通学者で、活動期間は二年。現在は二期目で、登録数は六九名(男三〇人・女三九人)。

学生、フリーター、会社員、主婦、自営業など職業は様々で、年齢別に見ると、二〇歳代が一番多く二四人、次が六〇歳代で一九人となっている（平均年齢は四二歳）。

サポーター全員が集まる全体会議（平成一八年度は五月、七月、十二月に開催）のほか、おおむね毎月一回役員会（代表、副代表および後述する各チームの正・副リーダーで構成）を開いている。各サポーターは、活動部隊となるチームに属し、現在は、調査研究チ





区民まつりでの「てとりん」撮影会

ーム、てとりん着ぐるみ隊、サポーター通信チームが常設されているほか、統一地方選と参議院選に向けた二つのプロジェクトチームが設置されている。

調査研究チームは仙台市内の各投票所の投票率等の調査、地域傾向の分析、月一回行われる勉強会の企画・運営等を行っている。

てとりん着ぐるみ隊は、実働が中心で、仙台市選管のマスコットキャラクター「てとりん」の着ぐるみを用いた啓発活動を行っている。

サポーター通信チームは、年四回、選管と共同して機関紙「選挙サポーター通信」の編集・発行を行っている。

## 常時啓発活動

・選管・明推協主催のイベントへの協力

仙台市の選管および明推協が主催するイベントには企画段階から参画し、イベントの手

法や場所の選定等についての各種提案、イベントPRのための街頭でのチラシ配布などを行っている。若者が応募しやすくするための携帯メールの活用、チラシ・ポスターへのQRコードの採用などは、サポーターの提案によって実現した。

平成一七年一月にはイラン・イタリア共同制作映画「一票のラブレター」上映会の運営、平成一八年二月には選挙啓発キャンペーン「Do The Vote」選挙に行こう！の運営にそれぞれ協力するとともに、後述するサポーターの独自イベントに取り組んだ。

・てとりんを活用した啓発

マスコットキャラクター「てとりん」については、着ぐるみ隊が、PTA連合会主催イベント、小学生親子を対象にしたオリエンテリング、石ノ森萬画館主催の「みやぎキャラクター大図鑑」など様々なイベントに参加し、またテレビ出演や幼稚園訪問を行うなど、いろいろな機会を捉えて仙台市民への周知を図っている。最近では、「てとりん」の認知度が上がり、「てとりん」を見かけた人は選挙啓発で何かやっていると感じてもらえるようになった。また、「てとりん」をまちで見かけられると子どもたちが集まってくるほど人気者になっている。

・サポーター独自のイベントの開催

各種イベントへの協力のほか、年一回、サポーター独自のイベントを行っている。平成

一六年度は前記「一票のラブレター」上映会場で、投票票体験コーナーの設置、電子投票機の展示・体験、投票率比較・世界の選挙制度・選挙の歴史などについてのパネル展示、抽選会などを行った。

平成一七年度は前記「Do The Vote」に併せて仙台駅構内で「てとりん」ぬり絵コンテスト、同撮影会、選挙クイズなどを行った。三か月かけて準備し、多くの市民の参加を得ることができた。一八年度は太白区民まつりの会場で選挙クイズ、「てとりん」撮影会を行った。選挙クイズには延べ千人、写真撮影会には延べ三〇〇人が参加し、盛況であった。

・月例勉強会

平成一八年六月からは、原則月一回の勉強会を行うこととし、これまで「なぜ、投票に行かないのか?」「投票に行かない人たちへの反論」などをテーマとしたワークショップ、接遇研修、選挙啓発ビデオの上映などを行っている。

## 選挙時の啓発活動

選挙時においては、例えば平成一七年度の市長選挙では、サポーターの発案で、交通安全協会や明るい選挙推進協議会などと協力して、交通の「危険」と選挙の「棄権」を掛け言葉にした「キケン防止キャンペーン」を実施。これは、新聞・テレビでも取り上げてもらい、パブリシティ効果が大きかった。また、同選挙では、選挙管理委員会からの協力依頼



を受けて、「裏影プロジェクト」を立ち上げた。これは、KHB東日本放送の深夜バラエティ番組「裏影」とタイアップして、選挙啓発ソングの制作に協力するとともに、番組企画の「選挙討論会」へ「選挙に行く派」として参加し、投票率の低い二〇〇〜三〇歳代の方々に選挙の意義を訴えたものである。

## 統一地方選挙での取り組み

今度の統一選挙では、調査研究チームが、投票区ごとに平成一五年以降の投票率の平均順位と四年前の統一地方選の投票率を地図に落とし、投票率が低い地区の地域性を分析。その結果、地下鉄沿線の地区で投票率が低いことが分かったので、プロジェクトチームでは、地下鉄沿線啓発を重点的に行うことにした。

具体的には、「てとりん」が地下鉄に乗りしてPRを行ったほか、四カ所の地下鉄駅で街頭啓発を実施。また、投票率が低い地区をサポート自身が歩き、啓発チラシのポステイングを行うことにした。さらに、力を入れているのが「てとりんプロモーション」。これは、「てとりん」が週一回程度まちに繰り出し、出会った人に名刺を配布したり、職業体験をして、その様子をブログの中で「てとりん日記」として報告している（ブログは毎日更新）。プロジェクトチームの中に「ブログ編集班」を設け、どういう職業体験をするかなど企画のネタ出しを行っている。これまでに、理容店やカフェ、クリーニング店、消防署などで職業体験を行い、どんなに仕事が忙しくても選挙に行くようPRしている。

# 品川区明るい選挙推進協議会（東京都）

— 年会費千円で自主運営 —

## 創立五〇周年を迎えた品川区明推協

品川区明るい選挙推進協議会は、昭和三二年六月に設立され、平成一九年に五〇周年を迎えた。会員数は現在二〇〇人。品川区在住の民間人が自主運営しているボランティア団体である。役員として、会長一名、副会長二

名、会計二名、書記二名、監事二名、地区代表八名、専門部長四名を置いている。機関運営としては、年一回の総会のほか、監事を除く一九名の役員で構成する運営委員会を設置し、八月、十二月、一月を除く各月に年九回委員会を開催、協議会の運営や事業を行う上での必要な方針および重要事項を協議して決

定している。

入会は、会員または町会長・自治会長の推薦により、運営委員会で決定される。会員の定数や任期はなく、年会費千円を納付する。

## 活動の概要

活動は、地区会による活動と専門部会による活動の二本柱で進めている。

活動の中心となっているのは、区内を八つに分けた地区会による活動である。地区代表を中心に、毎月定例会（八月、十二月、一月を除く）を開き、運営委員会で話し合われた内容を報告するとともに、地区で実施するイベント会場での啓発、選挙時の街頭啓発の計画、教養講座のテーマなどを検討している。

それに基づき、各地区では、常時啓発として①話し合い活動、②教養講座の開催、③イベント会場での街頭啓発など、選挙時啓発として①街頭啓発、②ポスター掲出、③啓発誌の町会回覧などに取り組んでいる。

## 常時啓発活動

常時啓発の基本となっているのが、話し合い活動である。有権者の政治意識を高めるため、会員各自がサークルや職場の仲間、町会・自治会の知人などを集め、政治、経済、環境、福祉、教育などをテーマに意見交換を行っている。平成一七年度は、八地区で計七六四回開催し、延べ六七六四人の区民が参加



した。

教養講座は、毎年秋に行っている。身近な問題と政治とのかかわりや選挙の大切さを区民に理解してもらうのがねらいだ。地区代表を中心にテーマを設定し、講師に依頼して講演会を開催している。会場では明るい選挙推進協議会のPRにも努めている。平成一七年度は「身近な防災対策」「歴史から学ぶ健康の知恵」など四講座を開講し、延べ二二四人が参加した。

イベント会場での街頭啓発では、各地区の様々な行事に参加し、「三不運動」の推進と選挙啓発に努めている。平成一七年度は、区民まつりや福祉施設・文化センターのまつり、環境フェスティバルなど、計十一回のイベントに参加し、啓発活動を展開した。

## 選挙時啓発

一方、選挙時啓発として、平成一七年度は、東京都議会議員選挙と衆議院議員選挙があり、両選挙ともほぼ同規模の啓発活動を行った。

街頭啓発では、若年層をターゲットとし、地区ごとに保育園・幼稚園や大学・専修学校などの門前に立って、子どもを送迎する若い保護者や登校する学生に投票参加を呼びかけた。延べ一九〇人の推進委員が参加し、チラシ八千部のほか、折り紙、ウェットティッシュ、クリアファイルなどの啓発グッズを配布した。

また、選挙名および選挙期日、啓発標語を

記載したポスター四〇〇部を会員宅と近隣に掲出し、さらに選挙結果などを掲載して発行する啓発誌「しいの木かわら版」一万二千部を区内町会・自治会に配布した。

## 専門部会の活動

活動のもう一つの柱となっているのが、専門部会の活動である。専門部会は、①総務部会、②事業部会、③広報部会、④研修部会の四部会で構成され、会員はいずれかの部会に所属し活動している。

総務部会は、総会資料などの準備、協議会活動の企画、予算・決算に関する事項、ボランティア保険に関する諸手続きなどを担当している。事業部会は、各地区で行われる啓発事業を企画運営する。啓発グッズの検討もを行い、自主財源による購入を行っている。広報部会は、年一回発行する会員報「しいの木」(五〇頁)の編集を行い、会員をはじめ、区議会議員や各町会・自治会長に配布している。選挙時には「しいの木かわら版」を発行している。研修部会は、自主研修のほか、品川区から委託された区外研修の企画と運営を担当。平成一七年度は、「品川区における教育改革」をテーマに自主研修を行い、また、区外研修としては栃木県足利市を視察した。

このように会員は、地区で活動するとともに、専門部会に所属して全区的な活動の役割を担うことで、協議会への帰属意識を高め、

会員間の交流を深めている。

## 新成人との意見交換会

協議会では、若年層の政治離れ・選挙離れに歯止めをかけるため、広報部会の部員が中心となって、新成人との意見交換会を行っている。品川区では、選挙の際、区内四三投票所の投票立会人の一人に新成人を起用しているが、意見交換会は、その投票立会人を経験した新成人に参加を呼びかけて開催したものだ。

平成一七年は三回開き、新成人十二人を含み延べ三七人が出席。①衆議院議員選挙について、②若年層の投票率を上げる方法、③大学内での啓発方法、などをテーマに話し合いを行った。「候補者がよく分からないから選挙に行こうと思わない」「啓発物の代わりに候補者の情報を掲載した選挙公報を配布した



区民まつりでぬり絵を配布



らどうか」など、新成人の生の声や様々なアイデアを聞くことができた。意見交換会に参加した若者を主体にした啓発母体を組織化することが、これからの検討課題である。

以上、運営委員会と地区会の密接な結びつきにより、スムーズで活発な啓発活動を展開

している。特に、協議会を支えている地区会は、地区代表のもと、それぞれまとまりを見せている。日ごろの地区定例会や地区専門部会、懇親会などを通して培われたチームワークの賜物であり、選挙時の啓発活動での大きな力となっている。

## 横浜市青葉区明るい選挙推進協議会

——「企画運営チーム」を中心に事業展開——

### 横浜市青葉区明るい選挙推進協議会の特性

青葉区明るい選挙推進協議会（以下「青葉区協議会」）が活動する青葉区は、横浜市北西部に位置し、川崎市と東京都町田市に隣接する。有権者数は平成一八年九月二日現在、二万三、四八八人となっている。東京からの転入者が多く、四割以上は東京二三区に通勤・通学している。若い世代が多いのが特徴で、平均年齢は三九・八歳と市内二番目の若さ、将来有権者となる一五歳未満の人口は市内最多となっている。

こうした特性は、各選挙の投票率にも現れている。国政選挙は横浜市平均より毎回二～三ポイント高く、地方選挙は逆に二～四ポイント低い傾向にある。例えば、平成一七年の衆議院議員選挙の投票率は七一・九%で、一

八区中では最高だった。一方、平成一五年の統一地方選挙の投票率は四四・三%で、下から二番目。国政に比して投票率の低い県政や市政への関心を高めることが、区の大きな課題となっている。

### 青葉区協議会の概要

青葉区協議会は、青葉区誕生前年の平成五年に緑区北部明るい選挙推進協議会として設立され、平成六年の青葉区誕生と同時に現在の名称に変更された。

現在、区内の各種団体の代表者等からなる推進委員一四名と、自治会・町内会からの推薦者および平成一四年度まで区選挙管理委員会と共催で実施した常時啓発事業「コミュニケーションカレッジ」の受講者などで構成される推進員一九〇名の計二〇四名で活動している。

### 企画運営チームの発足

組織の特徴は、平成一七年度から、事業実施の際に運営の中心として活動する「企画運営チーム」を設け、事業を展開していることである。

きっかけとなったのは、平成一六年度の意見交換会だった。意見交換会は、常時啓発や選挙時啓発の効果的な展開方法などを推進委員・推進員同士がテーマごとにグループに分かれて話し合うもの。その中で、「やる気のある推進員はたくさんいる。もっと推進員が働ける場を設けるべきだ」「推進員には様々なキャリアを持つ人がいる。活用すべきだ」などの意見が多く出された。そこで、協議会機関紙「あおばイコット通信」で参加者を募集。その結果、男性五名、女性一名が推進員に応募、平成一七年六月に同チームが発足した。企画運営チームの活動は、個々の事業の企



「最後の給食のデザートを決める」  
投票後の開票風景



画や広報・運営など多岐にわたる。事業実施に向けての事前の打合せ会議も活発に行っており、平成一七年度は一〇回開催した。そこで話し合われた内容は、全推進委員・推進員で共有するため、機関紙「イコット通信」などで提供している。

## 区民まつり

主な事業は、まず毎年多くの区民が来場する区民まつりに参加。協議会独自にブースを設け、選挙のしくみや歴史、直近の選挙の投票区別投票率のパネル展示などを行っている。

平成一八年度は、「期日前投票制度を知っていますか」などを問う選挙アンケートを実施した。アンケート回答者が会場のパネルの上にシールを貼る方式を採用し、回答者には、区独自の明るい選挙マスコット「えら坊」を印刷したクリアホルダーを記念品として贈呈した。ホルダーには期日前投票制度を解説したチラシをはさみこんだ。これらは、企画運営チームのアイデアを大幅に取り入れたもの。この事業には多くの推進員のほか、中学生六人もボランティアで参加し、「えら坊」の着ぐるみを着てPR、大活躍した。

## せんきよフォーラム「選挙出前事業」

政治への興味や投票参加意識の向上を図るため、市内各区で「せんきよフォーラム」を実施しているが、青葉区では若年層啓発に力

を入れ、将来の有権者である小学生を対象に企画している。平成一七年度は小学校二校で、六年を対象に「選挙出前事業」を実施した。区職員が扮した三人の立候補者が、六年生最後の給食に出すデザートにシャーベットのデザートに、各自が推す味（グレープ、リンゴ、オレンジ）についてのマニフェストを掲げ、選挙公報と選挙演説でアピール。それを参考に、児童がどのシャーベットが最後の給食にふさわしいかを考え、実際の選挙で使用している記載台や投票箱を使って投票した。開票も本物の計数機を使って全員で開票作業を行った。投票管理者、投票立会人などは近くの推進員と企画運営チームのメンバーが務めた。当日の様子はマスコミでも報道され、注目を集めた。

## 街頭啓発「ザ・イコット」など

選挙時啓発としては、街頭啓発「ザ・イコ

ット」を実施している。平成一八年三月の市長選挙では、区内三駅で計六回、延べ一〇七名が参加して行った。企画運営チームは、実施時間の設定や参加依頼文の発送、物品の仕分けなどの事前準備とともに、当日の実施場所におけるリーダー役を務めた。

青葉区では、選挙啓発の目的の一つである「きれいな選挙の実現」は推進委員・推進員の活動によって、ある程度実現している。しかし、もう一つの目的である「積極的な投票参加」は、特に地方選挙の投票率が低いことから、地域に根ざした活動に知恵を絞って「積極的な投票参加」を呼びかけていくこととしている。

また、同じ地域性を持った横浜市北部四区の合同研修会、全国の明るい選挙推進協議会との交流にも積極的に取り組み、様々なノウハウを取り入れて組織の活性化を目指していく。

# 明るい選挙推進サポーター（愛知県）

——自ら作成した教材で「選挙出前トーク」——

## サポーター制度の概要

若年層の各選挙における投票率の低下、政治への無関心が叫ばれる中、愛知県では、平

成一六年度までは「ヤングフォーラム」を開催し、若者に啓発用のホームページを作成してもらった等の活動を行ってきた。しかし、年々参加者は減少し、事業内容も慢性化した



ものとなってきたため、平成一七年度に今までの事業を抜本的に見直し、「明るい選挙推進サポーター制度」を立ち上げることにした。

明るい選挙推進サポーター制度は、県内の若者を明るい選挙推進サポーターとして委嘱し、定期的な会議の開催により政治や選挙について考える場を提供するとともに、啓発事業の企画・運営に携わることで、サポーター自身や県内の若者の政治や選挙についての関心を高めることを目的としている。

また、これまで県職員の視点で啓発事業を企画して同じような事業が繰り返されたことから、若者自らに若者向け啓発事業を企画・意見してもらうことで、効果的に若年層に対する啓発事業を実施できることも狙っている。

サポーターの参加資格は、県内在住の一八歳（高校生を除く）から二九歳までのボランティアで、意欲的な取り組みができる者を募集している。当初、一四名で活動を始めたが、ホームページによる呼びかけや大学での募集チラシの配布によって、現在では二五名まで増えている。内訳は、大学生が一八人、社会人が七人。サポーターには「明るい選挙推進サポーターネットワーク会議」に参加してもらい、事業として「選挙出前トーク」やワークショップを実施している。

## サポーターネットワーク会議

「明るい選挙推進サポーターネットワーク

会議」は、毎月一回開催しており、一七年度は計十一回、一八年度は昨年十二月までに一回開催している。

この会議では、若者への選挙啓発について話し合い、若者を対象とした選挙啓発事業を企画。選挙出前トークの実施が近い時期には、参加できるサポーターの役割分担や進行内容について打ち合わせを行う。実施後には、反省と次回のテーマについて検討を行っている。

会議は、サポーターたちが世間話をするような雰囲気自由に意見を言い合えるよう工夫し、職員も一人人として発言し、サポーターと意見をぶつけるようにしている。当初は、抽象的な意見や実現可能性が低い意見も多かったが、回を重ねるごとに整理され具体性のある意見が多くなり、啓発事業への貴重な参

## 選挙出前トーク

「選挙出前トーク」は一七年度から始めた事業で、未来の有権者である小学生、中学生及び高校生に対し、選挙に関する話や模擬投票を通じて、選挙の大切さを認識してもらうことを目的としている。実施を希望する小中学校に、県選管職員と実施校が所在する市町村選管職員および明るい選挙推進サポーターが出向き、協力して実施する。会場となる体育館などに本物の投票箱、投票記載台を設置し、選挙制度の説明、投票管理者・投票立会人を



ワークショップ  
選挙出前トークで使う資料を作成中

配置した模擬投票、選挙についての質疑応答、クイズなどを行っている。児童・生徒への実施後のアンケートでは「投票という貴重な体験ができた」「投票に行くことは難しいことではないことがわかった」といった声が多く寄せられている。

明るい選挙推進サポーターは、この出前トークで、模擬投票の進行役や候補者役を務め、また、出前トークの最後に選挙の大切さ伝えるメッセージの役を担っている。児童・生徒にとって年齢的にも近いボランティアであるサポーターと共同で行う出前トークは、職員だけで行うものよりも児童・生徒に好評で、また、新聞などでも取り上げられやすく、パブリシティとしての効果も大きい。

一七年度は計一九校で選挙出前トークを実施し、うち九校にサポーターが参加した。一八年度は二〇校で行い、うち十二校（小学校八校、中学校三校、高校一校）にサポーター



が参加した。

## ワークショップで教材等を作成

「ワークショップ」は、従前の「ヤングフォーラム」に代わるもので、県内の若者に、選挙などについて話し合い、考えてもらうことで、その意識を高めるとともに、各参加者が学んだことを地域、学校、職場に広めてもらうという趣旨で実施している。参加者は、明るい選挙推進サポーターを含む県内の若者であるが、サポーターはネットワーク会議を通じて企画段階から参加している。

例えば、一七年度のワークショップでは、「選挙への行き方トラの巻」と題して、若者向けに投票所への行き方などを解説したパンフレットを作成した。この企画の発端は、サポーター会議で出された「二〇歳になって初めての選挙は、投票所に行くことがとても勇気がいる。選挙に行ったことがない若者に投票が簡単であることをわかってもらいたい、選挙に行ってもらおう」という意見だった。若者に手にとって見てもらうために、なるべく絵を多く使い、一目でわかるものにしようという方針のもとに、ワークショップで制作した。県選管のホームページで公開しているほか、複数の団体で啓発資料として使われている。

一八年度は、「選挙出前トーク」で児童・生徒に示す資料を作成した。一七年度に使った資料はすべて県職員が作成したが、サポ

ーター会議で、「文字が多くて読みにくい」「もっと子どもたちの注意を引くような工夫が必要だ」といった意見が出された。そこで、全面的な見直しを行うことにし、サポーターたちが自ら改善案を作成し、配布資料のほかに、模造紙による大きく見やすい資料の作成、パ

## 名古屋市青年選挙ボランティア

―若者が若者向け選挙啓発イベント―

### 選挙を身近なものに

「名古屋市青年選挙ボランティア」とは、青年選挙指導者の育成を図るとともに、選挙啓発活動を通して若者に選挙をもっと身近に感じてもらうことを目的とした取り組みである。

平成一〇年度、名古屋市選挙管理委員会が高校生から二九歳までの名古屋市在住・在学・在勤者を対象に、募集を開始した。毎年四月にボランティアを募集しているが、登録者は発足当初より増えており、平成一八年度は、高校生をはじめ、大学生、社会人など四〇人が登録。年齢や職業などの違いを越え、活発な活動に取り組んでいる。

### メインは選挙フェスタの企画運営

メインの活動となっているのは、「選挙フ

ーポイントによるスライドの作成を行った。ワークショップで作成した資料は一八年度途中から選挙出前トークで活用したが、児童生徒の集中度が増し、実施後のアンケート調査や実施校の先生の感想でも「資料がわかりやすい」という声を多数聞くことができた。

エスタ」の企画・運営である。「選挙フェスタ」は、選挙を身近に感じてもらうという趣旨のもと、青年選挙ボランティアが主体となって毎年実施している若者向けの選挙啓発イベント。平成一八年度は「選挙フェスタ2006―みんなが日本代表―」というテーマを掲げ、十一月十一日に、名古屋の栄にある人気スポット「オアシス21」で開催した。

青年選挙ボランティアは、このフェスタの企画を考えるため、五月下旬から月二回のペースで会議を重ね、実施内容の細かな点まで検討した。検討当初は選挙イベントのイメージがつかめず、「何をやらたいかわからない」「難しそう」ととまどうメンバーも少なくなかった。しかし、会議を重ねることに、ベテランメンバーのリードで、「模擬投票や選挙に関するクイズを行ってはどうか」「選



挙のパネル展示をして、選挙の内容にも触れてもらおう」「クリタン（名古屋市の明るい選挙マスコットキャラクター）を使うことで選挙をより身近に感じてもらうことができるのではないか」「スタンブラリー形式にすれば、各コーナーへの参加者が増えるはず」など、様々なアイデアが出された。

九回にわたる企画会議の結果、若い世代ならではのアイデアあふれる催しが企画され、様々なコーナーを設けることになった。

具体的には、実際の選挙で使われている投票箱や記載台を設置し、来場者に投票を体験してもらう「模擬投票コーナー」や、「クリタン」を活用した「ダーツコーナー」「クリタン水風船釣りコーナー」などである。また、新たな試みとして「知事選挙PRコーナー」を設け、選挙パネルと知事選挙パネルの展示を行った。「愛知県知事選挙 投票日二月四



幼児も投票できる「模擬投票コーナー」

日」と大きく描いたクリタンの顔出しパネルを設置した「クリタン記念撮影コーナー」も設けた。出来上がった写真で投票日を周知しようというアイデアだ。

各コーナーを回るスタンブラリーも実施し、ゴールで知事選挙の投票日を答えてもらう選挙クイズを行い、投票参加を呼びかけた。ステージでの催しについても、ボランティアが企画し、出演者との交渉に当たっている。

よさこいの演舞、和太鼓演奏、チャダンスなどは、ボランティアが所属しているクラブやサークルに協力をお願いして実現した。また、地元で活躍中のシンガーソングライターのライブ、元中日ドラゴンズのエース・今中慎二氏のトークショーなども行うことができた。フェスタ全体の司会・進行やトークショーもボランティアメンバーが担当するため、台本の作成から読み合わせまで、入念な準備を整え、本番に備えた。トークショーでは、今中氏に選挙についての考えや若者に対する投票参加のメッセージを語ってもらい、多くの参加者に選挙をアピールすることができた。これらの努力の結果、平成一八年度の選挙フェスタは、およそ一万二千人の参加者を確保することができた。

## ホームページの開設など

青年選挙ボランティアは、フェスタの他にも様々な事業に参加している。名古屋市全一六

区の推進協議会委員・推進委員対象の「選挙セミナー」のパネルディスカッションや、選挙啓発のための市民向け講座にも参加し、選挙や政治について学んでいる。平成一八年度は、九月三〇日・一〇月一日に三重県津市で開催された「青年リーダー養成研修（東海・北陸ブロック）」にボランティアメンバー二名が参加した。

また、平成一五年度から名古屋市選挙管理委員会のホームページ内に「青年選挙ボランティアのページ」を設けている。同ページでは、選挙フェスタの内容や青年選挙ボランティアの活動などを紹介。「今年で二〇歳、選挙についてもっと知っておきたいという気持ちで青年選挙ボランティアに参加しました」「選挙フェスタのような、誰でも気軽に足を運べ、選挙に触れられる機会は意味のあることだと感じました」など、青年選挙ボランティアの感想や意見も載せている。

選挙時啓発にも取り組み、市選管が行う街頭啓発キャンペーンに参加している。平成一八年の衆議院議員総選挙では、愛知県選管の明るい選挙推進大会に出席し、市代表として体験発表を行った。

このような活動に参加していく中で、学校の自由研究課題に「選挙」を取り上げ、選挙を取材する青年選挙ボランティアも現れている。

若者の選挙離れの原因の一つとして、「選挙」という言葉に対し「難しい、よく分から



## 市民公開討論会を発案

何度か集まりを重ねて事業計画を練る中、

「たつの夢くらぶ」は、兵庫県たつの市の社団法人龍野青年会議所と龍野商工会議所青年部の両青年経営者団体のOB有志が中心となり、平成一〇年十二月に設立した団体である。事業経営者やその後継者であるメンバーは、それまで様々な地域づくり活動に取り組んできたが、青年会議所等卒業後も、まちづくりに向けて継続的な活動を行っていこうとの思いを共有したことが、くらぶ結成のきっかけとなった。両団体のOBと若干の現役メンバー十一人がクラブの結成に参加した。

## たつの夢くらぶとは

### 市民公開討論会を継続開催

## たつの夢くらぶ（兵庫県たつの市）

ない」というイメージが持たれていることが挙げられる。「難しい」と感じるために関心が持たれず、敬遠されている現状を変えていくには、若者に選挙を身近に感じてもらう必要がある。その役割を担っているのが「選挙フェスタ」であり、若者が選挙に触れる貴重な機会となっている。そして、若者に対して

効果的に訴えかけ、意識を変えることができるのは、青年選挙ボランティアのような同世代の若者をおいて他にないのではなかろうか。

選挙に関心のなかった若者に選挙に触れるきっかけをつくったという意味で、青年選挙ボランティアの活動の意義は大きい。

大きなテーマの一つとして「選挙」が浮かび上がった。「選挙は国民の権利であり、また義務でもある。選挙を通して代表を選ぶことは、自分たちの住む町を、ひいては日本をよりよくするための第一歩ではないか。市民の意見や思いを市政や国政に反映させるには、少しでも投票所に行く市民を増やし、投票率を上げる必要がある」との意見で一致をみた。

そのためにはどういう方法があるのか、我々に何ができるのかについて議論を重ねた。その第一歩として取り組んだのが、「市民公開討論会」の開催である。「投票しない人が多いのは、候補者に身近に接し、政策や理念を生の声で聞く機会が少ないからではないか。立候補予定者から直接政策や理念が聞ける場を設け、市民に政治や選挙への関心を高めてもらうことで投票率の向上に貢献しよう」というのが公開討論会開催のねらいだ。

## 市議会議員選挙での取り組み

平成十一年四月に市議会議員選挙が執行されることから、その立候補予定者をパネリストにした公開討論会を企画した。

開催に当たっては、公職選挙法に触れることのないよう、選挙管理委員会にもたびたび足を運んで指導を受けるなど、入念な準備を進めた。公平性・中立性を期すため、立候補予定者の発言の時間や回数などには特に気を配った。立候補予定者からは、「短い時間では政策や理念を十分に伝えることができない」との意見も出されたが、できるだけ多くの課題についての考えを聞くため、時間的な制約があることに理解を求めた。

立候補予定者二十八人に呼びかけたところ、一〇人が参加。四月一六日に市内の赤とんぼ文化ホールで「これからの『龍野』を語る

このからの「龍野」を語る  
**市民公開討論会**  
 日時：4月16日（金） 開場：午後6時30分 開演：午後7時00分  
 場所：赤とんぼ文化ホール（大ホール） 主催：市民公開討論会実行委員会  
 入場無料  
 パネラーのみなさま  
 浦田 義和 様 原田 研一 様  
 桑野 元澄 様 前田 守彦 様  
 塩谷 義明 様 松本 勝巳 様  
 妹尾 元和 様 三木 茂毅 様  
 高島 俊一 様 山本 富士子 様

公開討論会周知用チラシ

市民公開討論会」と名付けて開催した。

初めての試みに約六五〇人の市民が集まった。討論会では、公募で選んだテーマ「龍野の将来に求められるのは何か」について、各立候補予定者に考えを主張してもらった。参加した立候補予定者は全体の半数に満たなかったものの、地域活性化やごみ問題、介護など、様々な地域課題について白熱した議論が展開され、大きな成果を挙げた。

討論会を聞いた市民からも、「選挙ではいろいろとしがらみがあり、一人の候補者の話を聞きに行くことがはばかれるが、こういう機会に同時に多数の候補者の政策や考えを直接聞けるというのはありがたい」「公開討論会で立候補予定者の話を直接聞くことができ、投票するときの参考になった」などの声が寄せられた。

## 公開討論会を継続して自主開催

一定の手応えを感じた夢くらぶは、衆議院議員選挙が行われる平成十二年に、選挙区（兵庫十二区）立候補予定者三人の参加を得、六月九日に「市民の集い」を開催した。国政選挙であったことから、「これからの龍野を語る」を「あすの日本を語る」に変え、日本や政治に対する思いをアピールしてもらう政策討論会とした。

以後、地方選挙では「あすの龍野を語る！市民の集い」、国政選挙では「あすの日本を語

る！市民の集い」と銘打ち、四回開催している。

「市民の集い」は、回を重ねるごとに市民に認知され、立候補予定者の考えを聞こうと会場を訪れる市民も増えてきた。平成一五年一〇月二四日の「市民の集い」では、一二〇〇人収容の文化ホールが満員となり、会場に入りきれない市民も出た。そこで、平成一七年九月三日の「市民の集い」は、市内の揖保川河川敷にあるグラウンドで実施した。初めての野外での討論会では、三人の立候補予定者が、年金、郵政民営化、景気・雇用対策などについての考えを主張。約千人の市民が耳を傾けた。「市民の集い」は、夢くらぶが中心となり、実行委員会の形をとって実施している。会場の設営をはじめ、討論会の運営に、夢くらぶのメンバーだけでなく、多くの市民に参加してもらうのがねらいだ。

開催の費用は、夢くらぶのメンバー全員の

ポケットマネーを積み立てている。市民からカンパをもらっているものの、会場費や設営費、チラシ費用などで赤字となり、メンバーの積立金から補填しているのが現状だ。しかし、討論会の公平性・中立性を保つためにはこの形を続けざるをえない。

当初は、立候補予定者に開催趣旨を理解してもらうのに苦心したが、現在は恒例の催しとして定着している。多くの市民からも「楽しみにしている」との声を聞く。マスコミも毎回大きく取り上げ、選挙が行われるときは、公開討論会が市民の話題として上がってくるようになった。

たつの夢くらぶの願いは、国民の権利であり、義務でもある投票に多くの市民が参加し、よりよい地域、日本をつくっていくことである。公開討論会の成果を弾みに、次なる一手を打っていきたいと考えている。

## 青年法政大学周南会場運営委員会（山口県周南市）

### ——社会人対象の講座をOBが自主運営——

## 青年法政大学とは

青年法政大学は、山口県および開催市による選挙常時啓発事業の一つで、投票率が著しく低い三〇歳までの青年男女を対象に、政

治・法律・経済など様々なテーマについて学習の場を提供し、政治・選挙に対する関心を喚起することにより、投票率の向上を図ることを目的としている。山口県では昭和五〇年度から、周南会場では五五年度から始められ、





講義風景

現在、周南のほか下関、宇部、防府で開催されている。県が、実施主体に七〇万円を限度に、事業費の三分の二を補助している。

講座は、六月から十一月の半年間、毎週一回、平日の夜二時間半から三時間かけて行われる。仕事を持った社会人が六カ月の夜間学習を続けることは容易ではないが、「自分で磨こう、一緒に磨こう」を合言葉にしてきた。昭和五〇年度から平成一七年度までの修了者数は、二九三〇人にのぼる。

## 自主運営の周南会場

周南会場は、主催は周南市（合併前は徳山市）明推協と同市選管であるが、運営は歴代修了者有志による運営委員会が自主的に行っている。運営委員は、開講期間だけでなく一年間ほぼ休むことなく活動している。もちろん、自分の仕事のため、運営に時間がとれないこともあるが、時間に余裕のある人が協力し合い、運営している。このやり方は周南会場独特のもので、他の会場の模範となり、こ

の事業が長年にわたって存続できた一大要因ともなっている。一時期休講し再開した他会場に周南会場の修了生を派遣し、自主運営のノウハウを伝えて再開を支援した例もある。

運営委員会の活動は、講義内容の決定、講師の依頼、受講生募集、開講期間中は毎週火曜日に会議を開き、木曜日に講義、その他受講生の自主研究活動の支援と、幅広い。

毎年の運営委員会の立上げは、その年、青年法政大学をどのようなものにするかを想起することから始まる。自分が運営をやるうと思ったきっかけ、どのような形態で修了を迎えたいかなどを考えておくと、問題に直面したとき大きな支えとなる。その上で、前年度の反省や改善点について話し合い、その年の講義内容を決定する。

## 幅広い講義内容

周南会場では、六月から十一月の毎週木曜日の午後七時から一〇時まで、主に徳山青年館で講義が行われる。

講義内容は、もちろん選挙についての講義もあるが、政治・法律・経済を中心に多岐にわたっている。政治・法律・経済に関心を持つ地域人材を育成すれば、その人は職場や地域でリーダーとなる。その効果は、単に投票に行きましようと呼びかける啓発より、より良い政治を目指そうという質の高い啓発になるからだ。講義は聞くだけでなく、必ずディス

カッションを行い発表する時間を設けている。

また、講義では政治・法律・経済のほかに、社会の流れの中で新しく関心を集めている話題についても取り上げている。例えば、平成一八年度の講義では、医療、福祉、防災、教育についての講義を設けた。また、人間学「魅力的な人間になるために」など受講生が関心や興味を持つ講義も開催。

その他、受講生による自主研究活動を行っている。自主研究活動は、その年の参加者が七月の始め頃から班に分かれて取り組み、日ごろから興味のあること、ニュースで関心を持ったことをテーマに調査を行い、その成果を十二月に、他会場の受講生も一堂に集まる「クリスマス・トークマッチ」で発表する。この研究発表会は、これまで夜遅くまでがんばってきた受講生を送り出す意味で、運営委員にとっては準備などで大変だが一番楽しみなイベントである。近年では、「ザ☆年金」年金は私たちのパートナー（一五年）、「結婚」夫婦がよりよい関係を築くために（一六年）、「Rock's 労働人口の減少について」（一七年）などの研究が表彰されている。レポートの内容、発表風景を見ると受講生が短い期間で成長したことがわかり、それまでの苦勞が報われたような気がする。

## コミュニケーションが大切

青年法政大学の受講生は、運営委員や受講



生の友達や知り合いから転勤などで山口県に転入してきた人が増えてきている。受講生募集のポスターやリーフレットを見て参加した人が多いことから、最近ではこれらのデザインに力を入れている。業者に頼むと経費がかかるので、自分たちでパソコンやインターネットを使って、人の目につくように構成や配色を工夫している。それと同時に並行で、開講の準備や前半の講義の準備を実施する。

開講してからは、講義の状況や自主研究活動の各班の状況、各受講生の状況等を報告し合い、どのように接していくかを話し合う。青年法政大学に集まる人たちは、最初から他の受講生と顔見知りではないので、運営委員は受講生とのコミュニケーションを図ることが大切である。楽しくなければ次から参加しなくなるため、運営委員はいろんな人とコミュニケーションを取ることにし、運営委員自身のコミュニケーション能力を高め、日々の生活でも大いに役立っている。

また、講義や自主研究だけでなく、レクリエーションも積極的に行っている。例えば、四二・一九五kmのマラソンコースを、みんなでリレーして完走したりした。こうして交流が深まると、受講生が自主的に運営やレクリエーションに関わるようになる。

新たな人間関係を構築できたことの感動は言葉では言い表せないもので、それが青年法政大学の魅力とも言える。この魅力がある限り、

若人が楽しく学ぶ場として、人との絆を深めていける場として、選挙に関心を持って学ぶ場

として青年法政大学の活動は継続していく。

## ミニ選挙管理委員会2001(in延岡)(宮崎県延岡市)

― 若者が企画、脚本、主演のテレビCM ―

### 学生と若手市職員で発足

「ミニ選挙管理委員会2001(in延岡)」が発足したのは、平成十三年十一月。その背景には、同年七月二九日執行の参議院議員通常選挙の投票結果がある。このときの投票率は六二・二一％で、年齢階層別に見ると、二〇～二四歳が三一・九七％、二五～二九歳では四三・一〇％と他の年齢層に比べて極端に低い状況だった。

延岡市選挙管理委員会では、このような状況に対処しようと、社会人として働く若者をはじめ、市内にある九州保健福祉大学や聖心ウルスラ学園短期大学の学生の主体的活動を支援する事業を始めることにした。

この事業のねらいは、①若者に政治や選挙について考える機会を提供すること、②それぞれの活動の場で独自の啓発が行えるよう支援すること、③同世代の立場から投票参加を呼びかけることだった。事業の開始にあたって、平成十三年八月から九月にかけて、前記

大学の学生部に事業の趣旨を説明し、参加する学生を推薦してもらった。また、延岡市では平成十三年七月の参議院選挙から二〇代の投票立会人公募制度を開始していたので、同選挙の立会人を体験した若者にも、会の設立に携わってもらうことにした。

同年一〇月三日、九州保健福祉大学二名、聖心ウルスラ学園短期大学二名、それに社会人として市職員の二名を加えた計六人で、「選挙を考える若者の会(仮称)」の準備会を開催。一〇月三十一日から活動を開始した。しかし、「選挙を考える若者の会」という名称は堅苦しく、若い世代に受け入れられないという意見が会員から出され、「ミニ選挙管理委員会2001(in延岡)」（略称「ミニ選」）と改称することにした。第一回ミニ選は同十一月二十一日に開催された。

現在の会員は、九州保健福祉大学と聖心ウルスラ学園短期大学の学生と、二〇代の市職員、OB、OG、一九人で構成されている。



## ミニ選の活動

会員は、毎月定例ミニ選会議を開いて取り組むべき啓発活動について協議している。ミニ選の主な活動は、若い世代にもっと政治や選挙に関心を持ってもらうため、投票参加と棄権防止を呼びかける啓発活動や、政治や選挙について考えるイベント活動を行うことである。このため、大学や短大の入学式・学園祭に出かけ啓発活動や会員の募集を行い、たくさんの人が集う地域のお祭では、パソコンを使った簡単なゲームやミニ選の活動などを紹介している。

新成人に対しては、投票の方法など選挙に関する基本的なルールをやさしく解説したパンフレット「ハタチになったらゴーゴゴー選挙へ行こう！はじめの1歩」を作成。イラストの得意な会員が随所にイラストを描いた。平成一四年一月から、その月に二〇歳の誕生日を迎える市民宅に郵送している。また、成人式会場においても、パンフレットの配布などの啓発活動を行っている。

県選挙管理委員会が若者を対象に主催した



ケーブルメディア番組に出演

「しゃべり場せんきょ in 延岡」では、ミニ選の会員が多数参加し、二〇代の多くの若者と交流。班ごとに、どうすれば硬いといったイメージが強い選挙や政治を身近に感じ、投票率を上げることができると議論した。各班が候補者の立場になりマニフェストを作成、有権者にどのようにわかりやすく自分の政策を伝えることができるかを発表し合い、模擬投票を実施した。自分たちと同じように、選挙について真面目に考えている若者がたくさんいることを実感できた。

### 会員が企画・脚本・主演

ミニ選の活動の目玉となっているのが、選挙時啓発コマ・シヤルの作成である。選挙前にミニ選が企画・立案、制作したコマ・シヤルは選挙期間中、ケーブルメディア「ワイワイ」で放送されている。このケーブルメディアは、延岡市、日向市、門川町のエリアでケーブル・テレビジョン事業、広告宣伝事業を行い、多くの視聴者に地域情報を提供している。

平成一四年一月の市長選挙・市議会議員補欠選挙では、選挙管理委員会が出演したゴルフ編（不在者投票・投票日周知CM）と、ミニ選の会員が出演したミニ選編（投票参加・棄権防止CM）を、最近では、平成一七年九月の衆議院議員総選挙でのパペットマペット風編（選挙期日、期日前投票の周知CM）、平成一八年一月の市長選挙・市議会議員補欠選挙

では学生インタビュー編（選挙期日、期日前投票の周知CM）を作成している。また、夏の参議院選挙に向け、現在、海水浴場を舞台にしたビデオを制作している。

会員が企画し脚本を書き、自ら出演。市役所総務課広報係の職員に協力してもらい、その資機材を借りて、大学や市役所の会議室、延岡の豊かな自然を活用して制作している。

### 市長選で若年層の投票率が向上

平成一八年一月の市長選挙の投票率は、平成一〇年の同選挙の四九・四七%、平成一四年の同選挙の四五・九一%を大きく上回り六〇・二七%だった。

一市二町の合併に向けた新市長選挙だったことでマスコミが大きく取り上げたこと、立候補者が多かったこと（五名）が投票率アップの要因であると推察されるが、ミニ選が選挙前の一〇月から一月にかけて、成人式会場での啓発、大学や短大での投票参加の呼びかけとチラシ配布、投票日周知ポスターの作成と市内飲食店への配布・掲示、学生向け選挙啓発CMの作成と二カ月にわたる放送などに取り組んだことが、二〇歳代の投票率上昇の一因になったことは間違いないと思われる。ミニ選では、これまで市職員が会長を務めていたが、初めて学生を会長とし、ホームページの開設や小中学校での模擬選挙を計画するなど、さらに活動の場を広げようとしている。

## 民主主義の「目的」として 政治教育を考える

### ドイツの選挙教育が示唆すること

これまで四回にわたってジュニア選挙という選挙教育プログラムを中心に、ドイツの政治教育についてご紹介してきました。今回はシリーズの締めくくりとして、日本に暮らす私たちが、ドイツの例を今どのように理解することが求められているのかについて、著者の考えを述べさせていただきます。

政治教育をめぐる日独の現状を比べたときに気づく大きな違いは、ドイツでは、①政治教育のための政府機関や大学等の研究機関が各地に整備されていること、②現実の政治的論争・対立が積極的に教育内容とされていること、の二点です。そして正にこの二つの特徴が、政治教育としての選挙教育を可能にしているのだと考えられます。

つまりジュニア選挙という教育プログラムを有意義な形で実施するためには、一定の予

名古屋大学助教授  
近藤 孝弘（こんどう たかひろ）

〈プロフィール〉

1963年生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授。専門はドイツとオーストリアを中心とする現代ヨーロッパの政治教育と歴史教育。

算のほか多様な人々の協力が不可欠であり、そこで政府機関や研究機関の存在が大きな意味を持つてきます。特に全国各地で争点を異にして行われる選挙にそれぞれ対応した教材を用意するには、その地で政治教育の研究・実践に当たっている専門家が存在しなければなりません。むしろジュニア選挙は、そのような人々によって普段から行われている様々な政治教育活動の一つとして実施されているのです。

また、現実の政治的対立を教育内容とするというドイツの政治教育の原則も、とても重要です。それが確立されているからこそ、選挙という民主主義の根幹にかかわるテーマで、公的機関である学校が教育の対象とすることができると言ってもよいでしょう。

日本の現状を振り返ってみますと、社会や公民の授業は生徒に対して正解のある問いを投げかけている段階と言わなければならぬ

と思います。

しかし、政治とは明確な正解が存在しない事柄をめぐって行われるものです。判断や意見の分かれる問題について、合理的な思考を経て一定の立場を自覚的にとり、他方で対立する様々な考え方も理解するという民主主義の基礎となる習慣と能力を養うためには、やはり現実の政治問題を教材化することが適切でしょう。そして、学校がこうした知的な訓練を有効に行うのを支援するためにも、専門の政治教育研究機関が求められるのです。

### 歴史の重み

では、日本にできないことが、なぜドイツにはできるのでしょうか？

両国が見せる差異を説明する観点はいろいろありますが、あえて一言で言うなら、歴史の違いによるといえることになると思います。ここで言う歴史とは、歴史的な文化のことではありません。もし政治にとって文化が決定的なら、ナチズムを生んだドイツに民主主義が定着するはずはないのです。民主的な政治教育も夢の話でしょう。文化よりも、現代史の中で両国が置かれてきた国際環境の違いや、その歴史（特に自国史）についての人々



連邦政治教育センター（ボン）の教材センターでは、同センターが開発した様々な政治教育教材が展示・販売されている……………



の姿勢の違いが、政治教育をめぐる異なる現  
状をもたらしていると考えられます。

まず歴史上の相違点として、ナチズムが犯  
した犯罪が桁外れなものだったということは  
確かです。ただ重要なのは犯罪の規模よりも、  
戦後ドイツの指導者が、ナチズムを生んだ原  
因を一握りの旧政治家だけではなく、その政  
治家を支持し、協力した国民の中にも見たと  
いうことです。また、より現実的には、軍事  
的のみならず道徳的にも敗北したドイツが国  
際社会への復帰を図る際には隣国の人々の承  
認が必要であり、それゆえ、それまで人種主  
義や過激なナシヨナリズムを教えられてきた  
国民に、今度は民主的なヨーロッパ人として  
の教育を施すことが必要とされたという面も  
あります。

加えて、分裂国家である(西)ドイツの指  
導者は、東からのプロパガンダに対抗する必  
要性を感じていました。この点では、保守派  
だけでなく革新派の社会民主党も基本的には  
同じです。議会制民主主義を堅持して西側世  
界の一員であり続けることは、改革二大政党  
のほぼ一致した目標でした。

このような条件が戦後日本には備わってい  
ませんでした。いわゆる戦争責任はもっぱら  
旧軍部の問題とされがちだっただけでなく、  
近隣諸国に比べてアメリカとの関係ばかりが  
重視される時期が長く続き、さらに冷戦の下  
で非常に厳しい改革の対立を経験しました。  
こうして政治教育の必要性そのものが認識さ

れにくいだけでなく、それを実施する社会的  
基盤としての最低限のコンセンサスも欠けて  
いたと言わなければなりません。

しかし冷戦は過去のものとなり、歴史認識  
を含む隣国との関係が重要性を増している  
今、正に現代史を踏まえた政治教育が求めら  
れています。戦後六〇年あまりを経て、日本  
はドイツと同じ地平に立つに到ったのです。

## 目的としての政治教育

さて、このシリーズの最後に、新しい論点  
を一つ提起したいと思います。

私たちは、政治教育という活動を、民主主  
義を円滑に機能させるための道具として捉え  
がちですが、こうした理解ははたしてどこま  
で妥当なのでしょう？

実はドイツでは、戦後の早い時期から、政  
治教育はつねに期待されるほどの効果はもた  
らさないものだと考えられてきました。そも  
そも、その効果の客観的な測定は不可能と言  
って良いでしょう。それにもかかわらず、こ  
れまで紹介してきましたように、そこには多  
大なエネルギーが注がれてきたのです。

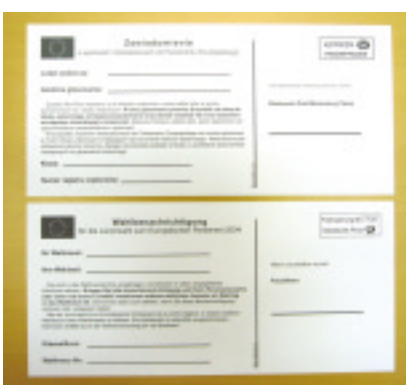
この点について私が思いますのは、政治教  
育は民主主義を実現するための道具としてよ  
りも、むしろそれ自身が一つの目的なのでは  
ないか、少なくとも密かにドイツの政治教育  
関係者はそう考えてきたのではないのか、と  
いうことです。あるいは、民主主義のために  
政治教育を行うという言い方は、その活動の

効果が実際に民主主義社会を守り、また深化  
させるという以前に、そこでの努力によって、  
民主的であろうとする自らの意思を再確認す  
ることを意味しているのかもしれない。

ワイマール共和国の挫折からナチズム、そ  
して冷戦下の国家分断と非常に過酷だったド  
イツの現代史は、厳しい民主主義への姿勢を  
生み出したようです。

そして、こうした厳格さの下で発展したド  
イツの政治教育は、欧州統合が進む今、国境を  
越えた広がりを見せています。もはや民主主義  
は一国内で完結するものではありません。二  
〇〇四年の欧州議会選挙の際には、ポーラン  
ドなどでもジュニア選挙が実施されました。

「政治教育はそれ自身が目的である」。この  
ことが持つ意味を理解するのは、ドイツとは  
異なる歴史の上にある日本人にとって簡単な  
ことではないでしょう。しかし、想像力を充分  
に働かせるなら、手が届かない認識というも  
のでもないはずでです。ドイツはおそらく完全  
なお手本ではありませんが、ヨーロッパの隣国  
だけでなく、私たちにも思考と行動のための  
確かな手がかりを提供してくれているのです。



欧州議会選挙(2004年)の際に実施され  
たジュニア選挙の投票通知書、ポー  
ランド版(上)とドイツ版

# 人をその気にさせるコミュニケーション

最終回

## モチベーションをたかめる コミュニケーション

福田 健

(ふくだ たけし)

〈プロフィール〉

(株)話し方研究所会長。コミュニケーションを軸とした講演、講座に多く出講し、著書多数。

### まず自らのモチベーション アップのために

モチベーションを高める。ここで、まず浮かぶのは、いかにして、人の、あるいは相手のモチベーションを高めるか、そのためにどうしたらよいか、という視点ではなからうか。だが、それより先に取組むべきは、自分自身のモチベーションであろう。

P・F・ドラッカーによれば、「そもそも、自分をマネジメントできない者が、部下や同僚をマネジメントできる筈がない。ほかの人間をマネジメントすることは、主として、自分が模範となることによって行うことができる」――

『経営者の条件』――

モチベーションにおいても、同じことが言える。自分をモチベーションできない者が、他人のモチベーションを高めるなどということとは、できない相談なのである。まず、自らと向き合うことからスタートしなければなるまい。

自分について考えてみる。どんなとき、自分はモチベーションが

アップするのだろうか。人間は誰でも、「こうしたい」「こうなりたい」という願望を持っている。「〜したい」という願望は、人に強い意欲を起こさせる。「〜」の部分により具体的に明確になると、願望から目標に姿を変える。

目標は、土地付きの一軒の家を持ちたいといった物的なものでも、司法試験に合格して弁護士になりたいでも、会社に入って開発の仕事を担当して、新しい技術を開発して成果をあげたいなど、各人様々である。はっきりした目標を持って、その達成に向かって意欲を燃やしている人は、モチベーションが高いのは言うまでもない。とは言え、誰もがそのような状態にあるとは限らない。

第一に、はっきりした目標を持たないままなんとなく過ごす人。自分は何をしたのか、どうなりたのか。そんな面倒なことは考えない。ラクに、適当に毎日を送る。ものが豊かで、成熟した今の日本の社会では、そんな生き方をする人も、珍しくないようだ。

第二に、目標は簡単に達成できないため、失望や挫折を味わう。

この世の中、努力すればいい結果が出るとは限らない。思い通りに行かない現実にあふかつて、「苛立つたり」「諦めたり」「相手のせいにして恨んでみたり」と、心が動揺して、モチベーションが一気に低下するときである。

やる気が起こらない、やる気がしない状況でも、自分の心を見つめることだ。すぐに腹を立てたり、簡単に諦めたり、相手のせいにしてたがっている自分の心の傾向を知って、感情のコントロールについて考えてみる。

ここでも、自分と向き合うこと、つまり自分とコミュニケーションすることが、モチベーション回復の有効な手立てになる。ときに自分を励まし、褒めるのも必要だろう。

### 相手のモチベーションを 高めるには

人をその気にさせるコミュニケーションの行く先は、何事も他人の協力を必要とする社会において、相手に意欲を喚起させる、すなわち、いかに相手のモチベ



ョンを高めるかに行き着く。注意しなければならぬのは、自分のモチベーションが高く、意欲に満ちている人は、とかく自分のやる気を他人にも求めて、押しつけてしまう傾向がある。人は「もつとやる気を出せ」などと押しつけられたり、「そんなやる気のないこととでどうするんだ」と、非難されたりすると、逆にモチベーションが下がってしまう、やっかいな存在なのだ。

ゲーテもこう言っている。「青年は指導されるよりも刺激されることを望む」。自分が楽しく、生き生きと物事に取り組んでいる姿が、相手に刺激となって「よし、やろう」という自発意思を呼び起こすのである。冒頭に引用したドラッガーの「自分が模範になる」という言葉も、相手への刺激作用を意味している。

第一に、相手が目標設定するのを、手助けすること。そのために、話し合うことである。

第二に、人間としての存在を認めること。普段から、折に触れ機会をとらえて声をかけること。つまり、「あいさつ」である。あい

さつとは、相手を一人の人間として認めて、声をかけ、相手と自分の間に通路を作るための、コミュニケーションの機能である。どんな集団でも、あいさつが活発に行われているところは、生き生きしているし、仕事の成果も上がっている。

誰でも、自分が認められていると実感できるとき、モチベーションが高まる。その意味で、協力によって成り立っている人間の社会を支えているのが、あいさつのコミュニケーションである。日頃、ろくにあいさつもしないようでは、相手のモチベーションを云々する資格はない。

第三に、相手の話に熱心に耳を傾けることである。コミュニケーションにおける「聞き手」の役割は、まことに積極的なものであるのに、聞くことを受け身にしか考えていない人が意外に多い。そのため、「聞くことぐらい簡単にできる」と、油断していないだろうか。黙って聞くのは、聞く内に入らない。「あなたの話を聞いているよ」「キミのメッセージは届いているよ」と、話を聞いているこ

とを、言葉と態度でしっかり伝えることが大事である。熱心に身を乗り出し、相槌を打ち、相手の目を見て、豊かな表情で話を聞いてもらうと、話し手は手応えを感じて、話すことに意欲と自信が持てるようになる。打てば響くように聞くことで、聞き手側からコミュニケーションを促しているのだ。何故かと言えば、身を入れて聞く行為は、相手を認める行為と重なるからだ。

近頃、無表情、無反応で話を聞く人を見かけることが多くなった。それだけ、話し手のモチベーションを低下させていることに気づかなくてはなるまい。聞き方が、人間のモチベーションに大きく影響することを承知しておこう。

第四に、相手の行為の結果に対する評価の仕方がモチベーションに関係する。例えば、「今の若い人はあいさつもろくにしない」と、文句を言う年配者は、元氣よくあいさつをしている若者に対して、「キミのあいさつは元氣あっているよ」と、職場が明るくなるよ」と、プラスの評価をしているだろうか。文句や小言を言うよりも、よ

い結果を褒める。褒めるコミュニケーションに力を入れ、工夫をする方が、人の意欲を高める。

日本人一般の傾向として、褒め上手の人が少ない。いざ褒めようとする、照れてしまうのは、褒めるのをおだてるのと勘違いしているからかも知れない。

## コミュニケーションのスキルを活かして

以上、モチベーションを高めるためのコミュニケーションのとり方は、前回まで述べてきたコミュニケーションのスキルの主だったものが、そのまま適用される。なお、人を動機づける上で好ましくないものとして、「脅し」「強要」「監視」がある。かつてはこうしたやり方で、無理な動機づけが行われていたが、今や過去のものだ。「競争」「報酬」も、行き過ぎると、逆効果を招く。コミュニケーションが充分行き渡っているかどうか、鍵になる。今や「成果主義」の時代だが、その行き過ぎが、モチベーションの低下を招いている事実も、忘れてはならない。

# 英国・選挙腐敗 防止の軌跡

最終回  
終わりのない政治浄化の課題



画・東 芳純



改革



短期

1885  
総選挙へ

一八八五年、第二次グラッドストーン内閣のあとの  
ソールズベリー内閣が短期間で辞職し、総選挙が行われた。

供応

買収

脅迫

選挙風景は一変し、  
買収、酒食による供応、  
暴力による脅迫などは影を潜めた。



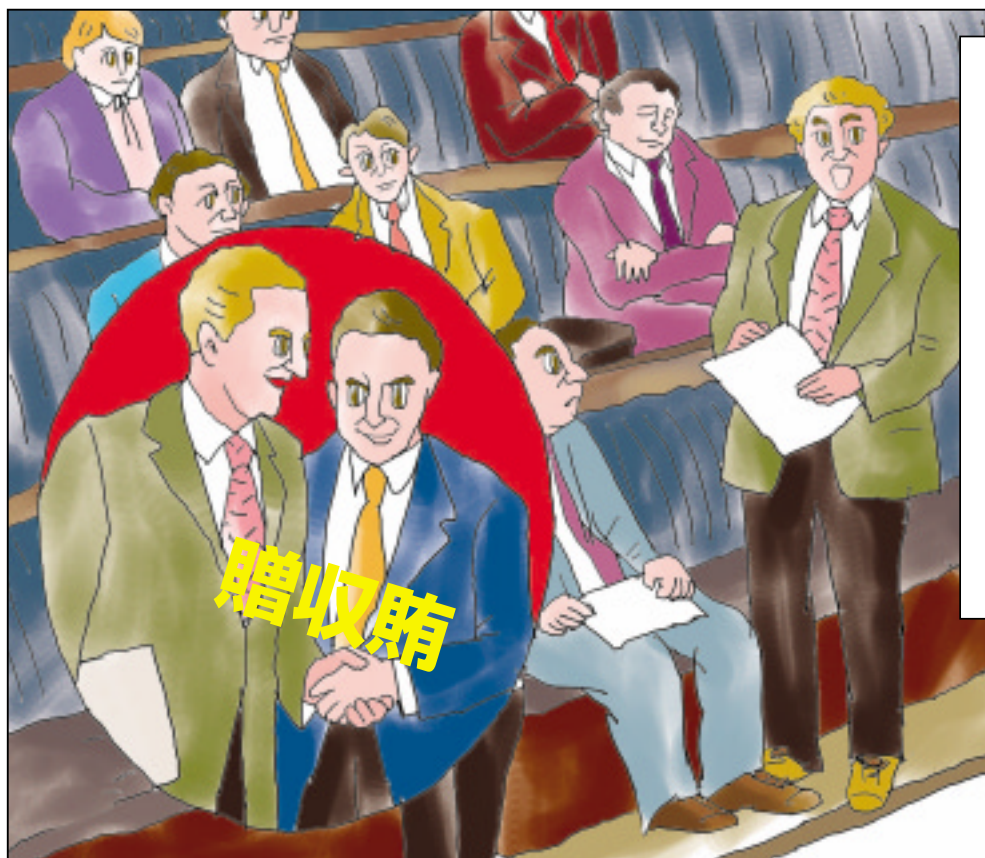


限度額が低く抑えられた選挙費用も大幅に下がった。  
額はその後も引き下げられ、現代では下院の平均的な選挙区で、一三〇万円ぐらいである。



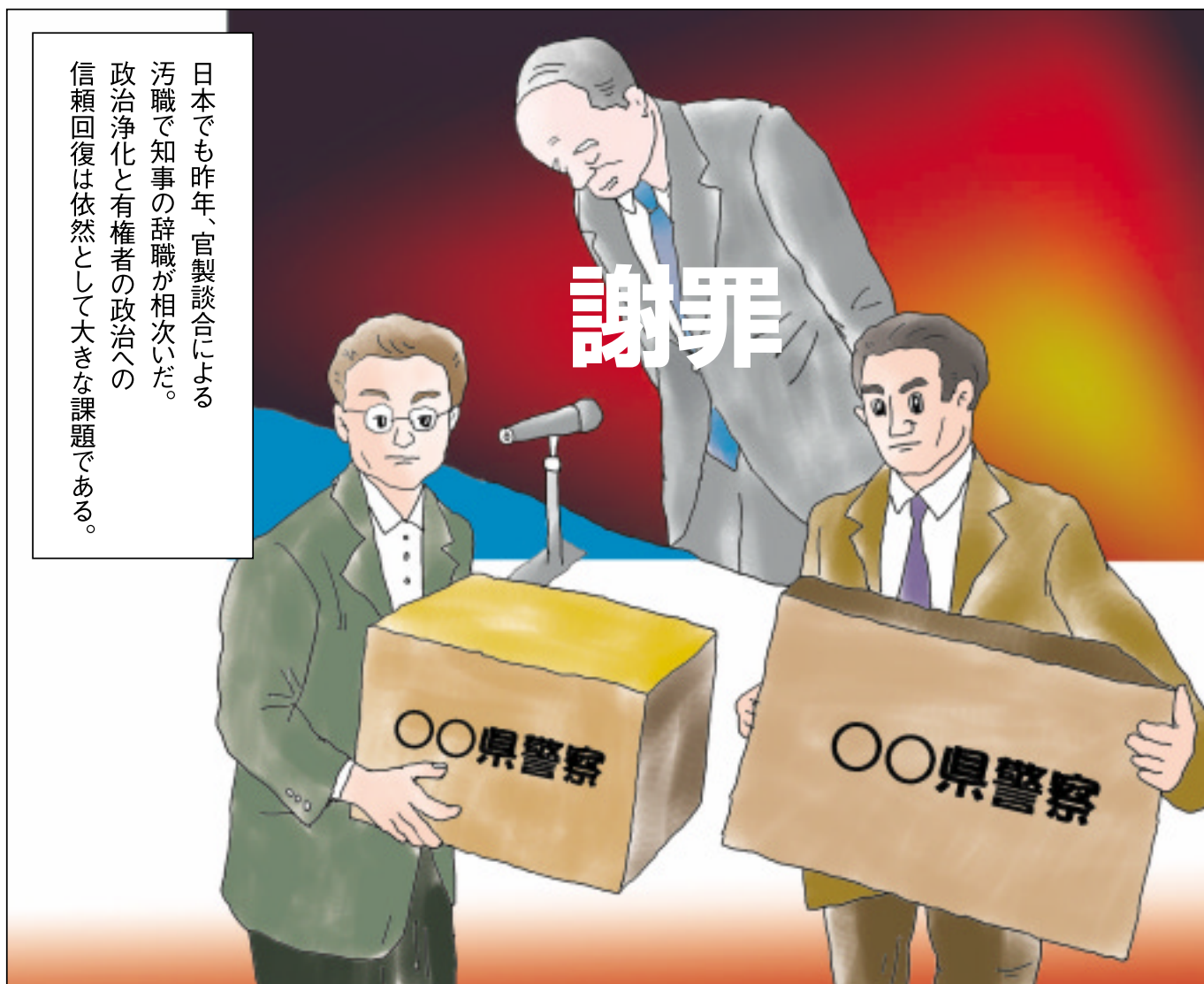


しかし、イギリスでは  
選挙腐敗がなくなった後も、  
贈収賄にかかわる事件は起きている。  
九〇年代、メージャー保守党政権末期には、  
献金をもらった業者に有利な質問を  
国会でする議員も現れ、  
政権瓦解の一因となった。



## 謝罪

日本でも昨年、官製談合による  
汚職で知事の辞職が相次いだ。  
政治浄化と有権者の政治への  
信頼回復は依然として大きな課題である。





# 中央研修会報告

明るい選挙推進協会は、平成一九年三月七日、八日、東京都千代田区で平成一八年度中央研修会を開催し、都道府県、指定都市の明推協会長、選挙書記、市区町村明推協の会長など、約一六〇人が参加しました。最近の選挙制度の動向や進展する地方分権と統一地方選挙の関わりについての講演が行われたほか、「平成一八年度明るい選挙推進優良活動」表彰団体の事例発表や「臨時啓発の取り組み」をテーマとしたパネルディスカッションが行われ、会場も交えた熱心な討議が繰り広げられました。

一日目の三月七日は、総務省の久元喜造選挙部長が「最近の選挙制度をめぐる諸問題について」をテーマに講演しました。地方公共団体の長の選挙について、マニフェストの作成、頒布が可能になったことや、ホームページを使った選挙運動など今後の選挙の方向性について言及しました。

次に「平成一八年度明るい選挙推進優良活動」に表彰された八団体の事例が、それぞれ品川区明るい選挙推進協議会会長の石井恒男さん、愛知県の明るい選挙推進サポーターの山内侯祝さんと神野友実さん、兵庫県のたつの夢くらぶ会長の宗實雅典さん、山口県の青

年法政大学周南会場運営委員会委員長

の末富和彦さん、ミニ選挙管理委員会2001 (in

延岡) 会長の小野史織さん、仙台選挙サポ

ーターの会代表の新野智弘さん、横浜市青葉区明るい選挙推進協議会

推進員の髙橋敦子さん、名古屋市青年選挙ボランティアの髙田沙絵子さんから発表が行われました(各団体の活動の詳細は本誌特集参照)。

二日目の三月八日は、財団法人東京市政調査会の西尾勝理事長が「地方分権改革からみた今回の統一地方選挙の意義」をテーマに講演しました。西尾氏は、地方分権改革・政治

構造改革の流れや自治体を取り巻く環境の変化を分かりやすく解説するとともに、今回の統一地方選挙に及ぼす影響を指摘し、「度重

なる首長や政治家の不祥事により、国民の政治不信、政党不信が広がり、無党派層が拡大

していることは、ある意味自然な流れ」としながらも、「政党政治に戻していくことが必

要」と強調。「どうやって政党政治を再構築するのかが、国会議員だけでなく地方議会

員にも問われている。今後を占う上でも、今回の選挙結果に注目したい」とまとめられま

した。

続いて、「臨時啓発の取り組み」をテーマにしたシンポジウムが行われました。神奈川県明るい選挙推進協議会の吉村恭二会長の進行のもと、山形県、新潟県上越市、三重県、

横浜市の取り組みが紹介されました。

まず、山形県選挙管理委員会の渡邊哲哉主事が、「選挙啓発サポーター企業・団体」の導入のねらいと事業概要を説明。続いて、上越市の「選挙に行こう！若者委員会」委員長の新浦徹さんと、三重県の青年選挙リーダー組織「ライトスタッフ」メンバーの松山元洋さんが、大学生や新成人などの若者が中心となって活動しているそれぞれの組織の結成経緯や啓発活動の状況などを紹介しました。横浜市選挙管理委員会の大橋弘昭啓発係長からは、平成一八年の市長選挙での啓発活動の概要と大学で行った同選挙の有権者の投票行動について、分析結果などが報告されました。

事例報告後、パネラー同士で意見交換が行われるとともに、会場から選挙啓発への企業の協力のあり方、啓発活動における若者の役割やマスコミの活用、若者組織と明推協との連携などについての質疑や意見が出され、活発な討議が展開されました。これらを受け、吉村会長は、企業、民間団体、若者、大学など社会資源を有効・適切に活用し、多様な組み合わせで啓発活動を行っていくことの意義を強調し、二日間の研修最後のシンポジウムを閉じました。



## 事業紹介

# ケータイ・ジャーナリスト・

# コンテスト」グランプリ発表

明るい選挙推進協会と政治情報の総合サイト「Yahoo!みんなの政治」は、若年層に政治、選挙、社会問題への関心と選挙に対する意識を高めてもらうことを目的に、「ケータイ・ジャーナリスト・コンテスト」を共催していました。この度終了し、三月二十一日、東京南青山にある若者に人気のスポット「スパイラルホール」において、優秀作品の展示会とグランプリなどの表彰式を行いました。

このコンテストは、「普段何気なく見過ごしている身のまわりのことが、実は社会や政治とつながっている」ことをコンセプトに、「ジャーナリスト気分」で身近な風景の中に潜む環境や福祉、少子化などのさまざまな「社会問題」を発見してもらおうというものです。

募集期間は二〇〇六年十二月二十五日から二〇〇七年二月十一日、今や若者に必須のツールとなった携帯電話で写真を撮り、メッセージを書き、Yahoo!上のコンテスト公式サイトに送ってもらいました。

公式サイトへのアクセス数は約三二万、応募ページへのアクセス数は一万四五八七、応募数は三六五六点と高い関心を呼び、応募者の九割は三〇歳代以下の方が占めました。

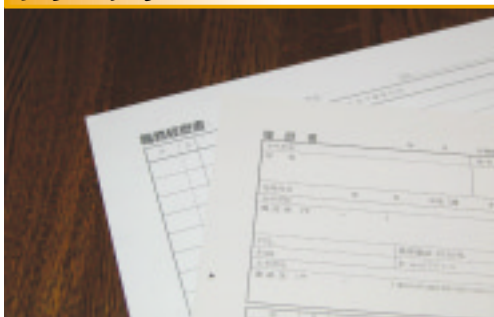
審査はまず一次選考として、事務局が選んだ

一〇〇作品の中から、審査員が「視点の鋭さ」や「作品の持つ社会性・メッセージ性」など、様々な角度から審査し、一五作品を選出しました。

審査員長にフリージャーナリストの寫信彦さん、審査員に作詞家で京都造形芸術大学芸術学部教授の秋元康さん、フリーランス・フォトグラファターの桐島ローランドさん、女優で日本テレビ「真相報道バンキシャ!」で報道キャスターを務める菊川怜さん、そして漫画家で、週刊文春などで活躍するコラムニストの辛酸なめ子さんにお願ひしました。

一次選考を通過した一五作品は公式サイト

## グランプリ



何十年かぶりに履歴書を書いた。結婚前の数年の銀行勤め、パートで働いたこと、正社員として勤めた四年間。でも、何かが足りない。自分の履歴で大事な事が抜けている。妻、母として三人の子育てをしたことだ。それを書く欄がない。子ども達、家族としての時間を大事にしたいと、専業主婦で過ごした期間は長い。それは、あくまで個人的な話で、生産性がなければ、社会的には特記に値しないようだ。でも、「ただの主婦です。」と言わせる社会では、結婚や子どもを産まないことを選択する人が増えるのわかる気がする。



表彰式

に三月一日から十一日まで公開され、二次審査は一般のみなさんによるインターネット投票を行い、得票数の多い作品をグランプリ・準グランプリとするという、選挙になぞらえた選抜方式が取られました。審査には三八〇六票が投じられました。

その結果、グランプリには伊藤敦子さん（奈良県在住）の「女の履歴書」（菊川怜さんによる審査員特別賞とのダブル受賞）が、また準グランプリには氏原綾野さん（東京都在住）の「笑顔の宝箱」（寫信彦さんによる審査員特別賞とのダブル受賞）が選ばれました。表彰式ではグランプリと準グランプリのほか、審査員特別賞五点、Yahoo!みんなの政治賞一点、優秀賞九点が発表され、受賞者には盾や賞品が授与されました。



## SNS「めいすいNET」開設

明るい選挙推進協会は、各地の選挙管理委員会職員、明るい選挙推進協議会の委員・推進員など明るい選挙推進運動の関係者が、情報を共有し、意見交換をすることができる「めいすいNET」を開設しました。この「めいすいNET」は、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）によるWEBサイトで、平成19年3月20日より運営を開始しました。みなさん、ぜひご参加ください。

### (1) 会員

会員に登録できるのは下記の明るい選挙推進運動関係者で、登録は会員から非会員への招待制とし、招待権限を持つのは協会及び選管職員です。実名制を採用しています。

- ①都道府県・指定都市、市区町村の選管職員
- ②都道府県・指定都市、市区町村の明推協委員、推進員等
- ③青年リーダー研修等、協会が主催する各種研修会への参加者等

### (2) 機能

日記（活動報告）、メッセージなどの機能を使って、SNS内で情報の収集・伝達、意見交換等ができます。

#### ①マイページ

会員は個人のページを持ち、日記の書き込み等により、情報を発信できます。

#### ②会員間の相互機能

会員は相互に日記の閲覧、コメントの書き込み、メッセージのやり取りができます。

#### ③コミュニティ（グループ）

複数の会員でコミュニティを作り、その中で特定の話題を設定して情報の交換ができます。

#### ④お知らせ機能

協会からの連絡事項やメッセージ受信などの更新情報などが、会員に自動的に通知されます。

#### ⑤検索機能

サイト内の情報がキーワード等により検索できます。

#### ⑥データベース

自治体ごとに投票率、明るい選挙推進協議会の組織や啓発事業などの情報を蓄積していただき、データベースとして会員が閲覧できます。

#### ⑦アンケート

SNS内でアンケートを実施できます（アンケートの乱立を避けるため、協会が実施します）。



## 協会からのお知らせ

### ○協会会長の交代

協会第7代会長の内田満氏が、平成19年1月26日に逝去されました。内田前会長は政治学者で、早稲田大学政治経済学部で長年教鞭を取られるとともに、日本選挙学会理事長や衆議院選挙区画定審議会委員などを務められました。平成14年4月に協会会長に就任され、協会の運営をご指導いただくとともに、各地で行われた講演などを通して明るい選挙の推進にご尽力いただきました。本誌のコーナー「名言の舞台」は、内田前会長の著書に発想を得たものです。謹んでご冥福をお祈りいたします。

また、2月16日開催の当協会理事会において、佐々木毅氏が新会長に就任しました。佐々木新会長は政治学者で、長年にわたり東京大学法学部で教鞭を取られ、法学部長、総長を歴任されました。現在、21世紀臨調共同代表、学習院大学法学部教授等を務めておられます。

## 編集後記

●特集は、平成18年度の明るい選挙推進優良活動表彰を受賞した8団体の活動を取り上げました。会費制で活動する品川区明推協、チーム制で活動する仙台選挙サポーターの会、小中学校などで出前講座を行う愛知県の明るい選挙推進サポーター、若者による活動のミニ選管など、全国の明推協活動をリードする事例です。

●連載してきましたドイツの政治教育、人をその気にさせるコミュニケーション、英国・選挙腐敗防止の軌跡は今回で終了です。ドイツの情報はとても貴重なものでした。

●次号は5月末の発行予定です。連載は海外の政治教育の紹介と、研修会開催などに役立つテクニックの紹介を、マンガは歴史上重要な足跡を残した政治家をテーマに編集作業を進めております。

●この広報誌につきまして、読者の皆様からの感想、ご意見をお待ちしております。また、「このテーマを取り上げたらどうか」「私たちのこの活動を紹介してくれ」、などの提案も歓迎です。よろしくお願いします。

### 編集・発行 ●財団法人 明るい選挙推進協会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門2丁目1番1号 商船三井ビル4F ☎ 03 (3560) 6266・6267 FAX 03 (3560) 6268  
〈ホームページ〉 <http://www.akaruisenkkyo.or.jp/> 〈メールアドレス〉 [akaruisenkkyo@mua.biglobe.ne.jp](mailto:akaruisenkkyo@mua.biglobe.ne.jp)

### 編集協力 ●株式会社 公職研

ちょっと読んで  
みまセンキョ?



## 「おまかせ」は、 お断り?

お寿司屋さんでは、「お好み」もよし、「おまかせ」もよし。

でも、選挙の際の「おまかせ」は、いただけません。

私ひとりくらい投票しなくても…。

そんな人まかせが、ひとりじゃないから問題。

有権者の半数以上が人まかせにしている選挙も多いのです。

それはやはりマズイですよ?